

聞一多の楚辭學

——古代と近代の交錯する時——

牧角悦子

一、はじめに

「死水」を代表とする格調高い詩風で中國近代の詩壇に一時代を劃した聞一多（一八九九—一九四六）は、同時に中國古典研究の分野で多くの優れた業績を残したことで知られる。聞一多の古典研究は、文學を生き物ととらえ、その生成と發展の跡を手繰らんとする意圖において一貫されている。中でも特に『詩經』・『楚辭』・神話の研究において彼の残した業績は、多少の誤謬を含みながらも、今に至るまで新しく且つ深い。

本論は、數ある聞一多の古典研究の中から『楚辭』に關する論述を取り上げ、その特色を明らかにすると同時に、それが聞一多自身の古典研究史の中で持った意味について考察するものである。

聞一多の楚辭學は、古代文學史という大きな視點に基づく詩歌の發生からそれをとらえたもの、緻密な文獻考證と文化人類學の應用により訓詁の分野に斬新な新説を打ち立てたもの、また歌謠・演劇の原點に立ち返つてそれを再構成しようとしたもの、そして最後には「愛國」というスローガンの下に過激な社會批判に結びついたものなど、自身の中でも様々に變化している。これらは、一括りにしてまとめて論じることの出来ないものであり、また前後矛盾に満ちたものでもある。特に激情に富んだ晩年の彼の民主運動と殉難は、屈原の愛國忠臣の英雄悲劇とも重なつて、學問研究とは異なる方向への力學を持つていた。

しかし、このような矛盾を孕みながらも、聞一多と『楚辭』との間には、宿命的とも言える關係が感じられる。それは近代という時期になぜ古代學の分野に新しい可能性が生まれたのかという問題とも關連する。古今を結んで感應し合う詩と詩人の共鳴和音、その一端を明らかにできればと考える。

二、初期の研究成果（第一期）

聞一多は、一九二九年に武漢大學の中文系の教授として招聘されて以後、それまでの詩の創作を一切やめて、中國古典研究の世界に没頭する。なぜ詩作をやめたのか、詩人であることと學者であることは聞一多の中でどのような意味を持ったのか、ということについては、その詩經研究との關連から考察した別稿をご参照願いたい^①が、事實として聞一多の一九二九年以降の業績は、ほとんど古典研究のみにその對象が限られることになる。

聞一多の多様な古典研究のなかでも、初期に力を入れて行われたのは、唐詩と『詩經』の研究であつた。唐詩研究としては一九三〇年の『杜少陵先生年譜會箋』、一九三二年の『岑嘉州繫年考證』など、多くの資料から唐代詩人の閱歷と交友とを明らかにしようとした成果がある。これらはそもそも杜甫研究の基礎準備として始められたものでありながら、そ

の緻密さと網羅性の廣さには恐るべきものがある。上記の二つの年譜の他にも、手稿として残された成果として、『唐詩箋證』『唐詩校讀法學例』『全唐詩辨證』『全唐詩校勘記』、また年表資料として『唐文學年表』『唐詩人生卒考（附進士登第年齡考）』『新舊唐書人名引得』『初唐四傑合譜』、また資料・札記など、その成果は膨大な量にのぼる。

また、ほぼ時を同じくして、『詩經』に關する論考も發表される。聞一多の詩經研究については、別に一稿を著したことがあるので、詳細はそちらに譲りたい。

始めに唐詩を、ほぼ同時に『詩經』を研究の対象とした聞一多が、『楚辭』に對しても興味を向け始めたのは、一九二九年八月、武漢大學に講師としてやってきた游國恩が、聞一多にも楚辭研究を勧めたことから始まる。しかし上述のようにこの時期の聞一多の研究対象は、唐詩と『詩經』とに重點が置かれており、本格的に『楚辭』に向かい合うようになるのは一九三二年、母校清華大學に中文系の教授として招聘されて以後のことになる。

ここで便宜上、聞一多の楚辭研究の時間的變遷を、三つの時期に分けておきたい。第一期は一九二九年から一九三七年まで、すなわち武漢大學に赴任してから、青島大學を経て母校の清華大學の中文系の教授となり、日中戦争の勃發により昆明に疎開するまでの期間である。この第一期は、本格的な楚辭研究の準備段階ともいえる基礎作業と、それをどう處理すればよいのかという方法論確立の時期であった。具體的な業績としては一九三四年九月の「天問釋天」、一九三五年四月の「讀騷雜記」、一九三六年一月の「離騷解詁」、同三月の「敦煌舊抄楚辭音殘卷跋・附校勘記」、同二〇月の「楚辭斟補」がある。

この時期における聞一多の楚辭學は、おそらく聞一多がその中心をおいていた詩經研究と並行する形で行われていたものと思われる。詩經研

究において提唱された視點、すなわち古代の歌謠は古代という時代に遡って理解されなければならない、という古代學の視點が楚辭學の分野にも十分に發揮され、「天問釋天」「讀騷雜記」には、『楚辭』を舊來の解釋から解放しようとする意欲が強く感じられる。

「天問釋天」の序文を見てみよう。

昔、王逸は天問後序を作り、この篇に注をつけたことを自ら誇つて言つた。「之を舊章に稽し、之を經傳に合し、もつて相い發明し、之が符驗を為し、章ごとに決し句ごとに斷じ、事事曉らかなるべし。後の學ぶ者をして、永く疑無からしむ。」しかし今こころみに王逸注で天問を讀んでみると、一つとして明らかなるものは無いと言つても過言ではない。王逸に續いて注をつけたものたちも、王逸注を補足したり正したりするものが多くあるけれども、それでも明らかにならないものが四・五割である。ああ、書物に注をつけることの難しさとは、これほどのものなのだ。私は非才を顧みず、もろもろの説の長所を斟酌し、それに自分の意見を加えて總まとめを作つてみようという氣持ちになつた。そこで篇中の天事について問うもの四十四句をまず取り出してこれを解釋し、これに「天問釋天」と名付けた。

昔王逸作天問後序，自詡其注此篇「稽之舊章，合之經傳，以相發明，為之符驗，章決句斷，事事可曉，俾後學者，永無疑焉。」然今試執逸注以讀天問，雖謂為無一事可曉，不過也。踵逸而起，注者相望。彼於逸注，補苴謬正，亦既多矣，然而不可曉者猶十有四焉。嗚呼，注書之難，有若是哉。余竊不自揣，欲斟酌眾長，兼附己意，作一總結帳之企圖。茲先取篇中問天事者四十四句釋之，顏之曰天問釋天。

ここには王逸注の不備に對する不満が表明されている。『楚辭』を文學作品として讀もうとする者ならば誰でも感じる本文と注釋との齟齬を、聞一多は徹底的に明らかにしようとした。王逸が『楚辭』を一種の經典になぞらえて解釋しようとしたのに對して、この「天問釋天」において聞一多は、訓詁と音韻學とを驅使し、更に文化人類學的視點を持ち込むことによつて、古代の習俗を根底に据えた新しい解釋を試みた。その一例を擧げてみよう。「天問」篇本文の次の二句についての解釋の部分である。

夜光何德、死則又育

夜光 何を德(得)て、死しては則ち又
た育する

厥利維何、而顧菟在腹

その利はこれ何ぞ、顧菟 腹に在る

「夜光」は月である。月は死んではまたよみがえり、そしてその腹の中に「顧菟」がいるという、そのわけを問うこの部分において、まず「德」が「得」であることを考證したのち、「顧菟」に「顧菟とは蟾蜍の別名である(顧菟當即蟾蜍之異名)」と注記し、これがガマガエルであることを證明する。「顧菟」は従來月のウサギだと考えられていた。ところが聞一多はこれが「蟾蜍」つまりガマガエルであることについて、極めて詳細な考證を加えた。そこには訓詁・假借・音通に基づく考證に加えて、月の満ち欠けとガマガエルの變態とを、命の再生において結びつけるという、古代文化に對する新しい視點が持ち込まれている。同時期に書かれた「詩新臺鴻字說」の中で、『詩經』新臺篇に詠まれる「鴻」が「蟾蜍」であることを立證したのと全く軌を一にするこの考證は、まだ出土文物による類推や裏付けが持ちこまれる以前の學術界にあつて、文献だけから導き出された極めて斬新な結論といふべきであろう^④。

次に「讀騷雜記」を見てみたい。これは一九三五年四月の天津『益世報』文學副刊に發表され、湖北版『聞一多全集』第五冊に收録される論文である。ここでは『楚辭』離騷篇に基づいて書かれた司馬遷『史記』の記載が、全面信頼できないものであることを述べた後、屈原の最期についての解釋が、時代によつて様々に變化することを説明する。なかでももつとも信じられていた憂國說(國を憂えたが故の死という解釈)について、それが時代の要請を反映した偶像であることを述べて次のように言う。

歴史上の人物の偶像化の程度は、往々にして時間と正比例する。時間が長ければ長いほど、偶像化の程度は深くなり、事實からますます遠ざかる。今日我々が聞き知っている屈原は、既に「離騷」の作者とは竝立できないほど變つてしまつてゐる。もしあなたが「離騷」がこの屈原の作だと思つてゐるならば、あなたは永遠に「離騷」を理解することはできない。もしあなたが心靜かに「離騷」を讀んで理解し、「離騷」はこの屈原の作のようではないと感じなかつたとすれば、あなたは自分の偶像崇拜の熱情に騙されてゐるということになる。

一個歴史人物的偶像化的程度、往往是與時間成正比的。時間愈久、偶像化的程度愈深、而去事實也愈遠。在今天、我們習聞的屈原、已經變得和「離騷」的作者不能竝立了。你若認定「離騷」是這位屈原作的、你便永遠讀不懂「離騷」。你若能平心靜氣的把「離騷」讀懂了、又(不の誤りか?)感覺「離騷」不像是這位屈原作的、你是被你自己的偶像崇拜的熱誠欺騙了。

また、「價值觀念の發生には、必ずその背景がある」と述べ、歴史上の人物が、後の時代には、それぞれその時代背景を背負つて價值付けをさ

れることを、戦国末期の屈原像、秦漢帝國における屈原像を例示することによって示す。

この「讀騷雜記」の一文は、偶像を作りあげて、そこから楚辭を解釋しようとする態度の批判として讀むべきものであるが、實はまったく別の意味で非常に興味深いものを感じさせる。聞一多はここで、屈原という歴史人物そのものを否定してはいないし、屈原が「離騷」の作者であることも否定してはいない。ただ、「離騷」の作者としての屈原像が、それぞれの時代背景によって、「自分の意見が入れられないことを逆恨みして憤懣に耐えず投身自殺した狂狷の士（班固）」になったり、「忠實な臣下（王逸）」となったりする、と言っているのである。この主張は、書かれたこの時点では、『楚辭』作品と屈原像とを直接結びつける解釋の批判として讀むことが出来る。しかし同時にそれは、一つの作品が時代の要請を背負って様々に變化し受容されることは仕方の無いことだという考えをも示唆している。だとすれば、後に最晩年の聞一多が、學術の枠を逸脱して強烈な屈原像をつくりあげ、それを崇拜することになるのも、文學作品とその作者が讀者によって創造されるというこの主張の上にてば、當然起こりうることなのである。とりわけその対象となる作品が、強烈な個性を持ったものであり、絶えず讀む者の感情に直接訴えかける力がある場合は、対象は一つの冷静な解釋にとどまることを許さない。晩年の聞一多が民主救國の戰士として、時代の要求を背負って「愛國者」屈原像を作り出していく可能性は、ここに既に芽生えていた、ということも言えるのである。

以上が第一期における聞一多の楚辭研究である。この時期聞一多は、詩經研究に着實な成果を残しつつ、神話・上古文學・古代文字・甲骨文中にも興味を廣げていく。『楚辭』は授業として講じられた他、研究としては文字考證に多少の成果を示すが、しかし本格的にまとまった形として

楚辭研究を世に問うのは、昆明に移って後のこととなる。

三、古代への憧憬（第二期）

聞一多の楚辭學がもつとも深まりを見せるのは、昆明疎開の時期、具體的には一九三八年から一九四四年までである。日中戦争の激化により、聞一多は北京を離れ、長沙の臨時大學を経て昆明の地に移る。北京大學・清華大學と天津大學の聯合した西南聯合大學の開校に当たって、聞一多は長沙から昆明までの道のりを、學生の組織した旅行隊と一緒にほとんどを徒歩で走破した。この六八日間の徒歩旅行の経験は、聞一多に大きな啓示を與えたようで、その中で直に觸れた南方の風物と民衆の生活、そして彼らの歌謠や習俗は、聞一多の古代への興味を大きく掻き立てた。古代の歌謠と習俗について、それまでの文獻のみによる研究を超えた、強い共感と憧憬とに基づく新しい中國古代研究が、昆明に移ってからの聞一多の古代學の特徴となる。

それは一つには、古代という時代を、歌謠・舞踏・演劇などを含んだ諸文化の原点として價値付けようとする、「上古文學史」の目論見につながっていく。一九四〇年五月、國內休暇の終わりに書かれた趙儷生あての書簡には、「詩經・楚辭・樂府・神話に關する舊稿をほぼ整理したほかに、また、易經の中からも多くの古代社會の資料を探し出しました。來年は『上古文學史』を講義に加えるつもりです。そこで、詩歌・舞踏・演劇の諸部門の起源と發展について、また整理研究しているところですよ。」と語られる^⑥。ここに挙げられた詩經・楚辭・樂府・神話及び易に關する研究は、それぞれ個別の成果としても結晶するが、それらを總合的に體系化し、文學史の流れの中で古代という時代と詩歌の發展について跡付けようとするのが、この時期の聞一多のもつとも大きな目標であ

った。

この古代の歌謠と習俗への關心は、楚辭研究においては、とくに「九歌」に對する重視に現れる。一九四〇年の「怎樣讀九歌」は、「兮」一字のもつ働きを、朗誦した時の音楽上の効果に求めると同時に、その他の「而」「也」「之」が「兮」一字に變つていく過程を考察したものであり、また一九四一年の「什麼是九歌」には「九歌」という言葉そのものの意味づけと、『楚辭』九歌の構造における各篇の役割について論じられている。聞一多はまた、「九歌」を、歌謠と舞踏を伴う歌舞演劇だと考え、文獻自體の考證と同時に、これを實際に演劇として舞臺に再現することを試みようとしていた。

聞一多が、演劇に關してもともと強い興味を持つており、それを様々に實踐したことについては別に論じたことがあるが、特にこの第二期の期間、聞一多は本格的に演劇活動を始める。一九三九年二月の話劇『祖國』の上演、同年八月の『原野』上演を通じて、聞一多は演劇というものが、音楽や舞踏や繪畫など藝術の諸部門を統合した総合藝術であると同時に、演じるものと觀衆とが強い一體感で結ばれる空間藝術として、その中に莫大なエネルギーを感じ取っていた。この歌謠と舞踏、そして演劇といういわば原始のパトスの中にある力強い生命力こそ、聞一多の最も共感した所であり、そしてまた彼の古代研究の根底にあつたものだと言えるだろう。「九歌」は彼のこの欲求に合致したものとして、この時期特にその研究に多くの成果をあげている。

一九三九年に國內休暇の權利を得て、ひたすら研究生活に没頭した時期から、一九四四年ごろまでの數年間が、聞一多の古典研究の最も油の乗った時期だつたといえる。上に述べた「九歌」に關する論考の他に、一九四二年に出版された『楚辭校補』は、楚辭研究においてその基本となるべきテキストの校勘を行い、その業績は高く評價された。

『楚辭校補』は、一九四四年に、學術審查會から學術賞第二等の評價を得る。この時の第一等は、湯用彤の『漢魏兩晉南北朝佛敎史』と陳寅恪の『唐代政治史述論稿』であつた。この二著がいずれも時代を畫する學術成果の白眉であることは言を待たない。このことは、これらと同等に評價された『楚辭校補』の學術上の價值を物語ると同時に、この時期中國の學術界が、後世に残る近代人文學の成果を多く擧げていたことも如實に語っている。

この第二期の聞一多の古典研究が、一つの方向性と確かな方法論に據つていたことを表す文書がある。一九四〇年十一月、清華大學の學長梅貽琦に提出された國內休暇の報告書「中國上古文學史研究報告」である。この中で聞一多は、古代文學の研究方法について、その主旨を以下のよう述べる。

一、文學作品を理解する

文學作品は文學史の最も基本的な、そして最も直接的な資料である。學者は文學作品に對して、深い理解をもたないままに、その來源と變遷とについてむやみやたらに語ろうとすれば、それは的も無しに矢を放つようなものではないか。ただ、上古文學は、讀むのがとても難しい。乾隆・嘉慶以來學者は校勘訓詁の工具によつて、舊說を補い隠れた意味を明らかにしてきた。その功績は偉大である。しかしそれでも古書の中の解釋の分らないものは、なお四・五割もあるのだ。今、清人の舊法にのっとり、それを補足するのに新しく出てきた資料（敦煌殘卷や殷墟卜辭、商周銅器など）を用い、先秦兩漢の諸古籍の良く分らない文字や意味について、更に進んだ追求をすることによつて、昔の賢者の傳や注、清儒の考訂のほかに、補足する所が出てくることを期待する。

二、時代背景を考察する

文學史は、文化史全船の一環としてある。だからある時代の文學史を研究するためには、同時にその時期のその他の諸文化部門の種々の現象をも視野に入れなければならない。いま、若干の問題を中心に、その社會背景、或いは思想潮流などの方面について、詳しい分析を加え、その相互關係を求めつつある。できれば、文學史というものを、帳簿式の記載にしか過ぎないものとしてではなく、一種の有機體の歴史として、作りあげたいと願っている。

一、了解文學作品 文藝作品為文學史之最基本、最直接的材料。

學者對於文學作品、苟無較深了解、而遽侈談其淵源流變、何異無的放矢？唯是上古文學、最為難讀。乾嘉以來學者憑其校勘訓詁諸工具、補苴舊說、發揚幽隱、厥功偉矣、然而古書之不可索解者、猶十有四五。今擬遵清人舊法、佐以較近新出材料（如敦煌殘卷、及殷墟卜辭、商周銅器等）、對於先秦兩漢諸古籍之奇文滯義、作更進一步的探索、冀於昔賢傳注、清儒考訂之外、有所補充焉。

二、考察時代背景 文學史為整個文化史之一環、故研究某時期之文學史、同時必需顧及此期中其他諸文化部門之種種現象。今擬以若干問題為中、就其社會背景、或思想潮流等方面、詳加分析、求其相互的關係、庶使文學得成為一種有機體的歷史、而非復一串帳簿式的記載而已。

清朝考證學など前の時代の注解の成果を評價し取り入れつつも、出土物や金石文といった文獻以外の資料を積極的に使い、更にそれに文化史的視點から見た古代という時代の特性への認識を加えることで、古代文獻はより正確に讀むことが出来るとするこの方法論は、いまでこそ古代文

獻を讀む際の常識になつているとはいえ、この時期にそれを明確に方向付けていたことは聞一多の古代學の新しさとして注目に値する。また、文學史を文化史の一部だと考え、社會背景や思想潮流との關連を視野にいれ、「一つの有機體」の歴史としてとらえようという文學史觀は、創造的視點に満ちている。この時期に書かれた古代文學史（「中國上古文學」、湖北版『聞一多全集』第一〇冊所收）の草稿には、詩の發生とうたのはじめとが、藝術や學術や呪術といった文化の様々な分野とのかかわりの中で自在に語られている。

このように、質量ともに類を見ない充實を得た聞一多の楚辭研究は、しかしある次期を境に大きく變貌する。それが、次に見る第三期（一九四四年七月以降）である。

四、愛國思想の稱揚（第三期）

一九四五年十一月に書かれた「屈原問題——敬つとんで孫次舟先生を質たす（屈原問題—敬質孫次舟先生）」は、屈原を「文學的太鼓持ち（文學弄臣）」と見做した孫次舟に對する批判である。そこには次のようにある。

彼（屈原）の時代は、彼が個人鬭争という形式を取る以外に如何なる鬭争の形式も許さなかつた。そして、この種の鬭争形式の最後の段階においては、砂を抱いて自らを沈める以上に、さらに鋭い武器など存在しようがなかつた。そして、彼は確かにそうやって鬭争したのであつた。彼は「人類の解放を勝ち取るための、世界的歴史の意味を持つ鬭争の参加者」であつた。もしも私もまた「屈原崇拜者」だと言ふのならば、私は特にこういう觀點から彼を崇拜するのである。

他の時代不允許他除了個人搏鬥的形式外任何鬥爭的形式，而在這種鬥爭形式的最後階段中，除了懷沙自沈，他也不可能有更凶猛的武器，然而他確乎鬥爭過了，他是「一個為爭取人類解放而具有全世界歷史意義的鬥爭的參加者」。如果我也是個「屈原崇拜者」，我是特別從這一方面上著眼來崇拜他的。

かつて偶像崇拜的『楚辭』解釋に鋭い批判を加えた聞一多は、ここでは自らを「屈原崇拜者」と呼ぶことにいささかの躊躇も示さない。反対に文學史的視點から屈原を「太鼓持ち」だと表した孫次舟に對して、「闘争」と「解放」の觀點からこれを批難している。また、「人類の解放を勝ち取るための、世界的歴史の意味を持つ闘争の參加者」というくだりには括弧がついており、これが聞一多自身のオリジナルではなく、恐らくは當時學習を始めた共產黨の政治闘争の文書に據るものであろうことを窺がわせる。

これより少し前、同年六月の「人民の詩人——屈原」は、詩人節に書かれた論文である。「屈原ほど人民に熱愛された詩人はいない」という一文で始まるその内容は、熱烈な屈原賛美である。屈原を人民の代表とし、その理由として次のような項目を擧げる。

- ・屈原は廣大な人民群衆に屬している。
- ・「九歌」が民歌であることは、明らかである。
- ・「離騷」は統治階層の罪行を情け容赦なく暴露し、その罪狀を厳しく斷罪した。
- ・人民の形式を用いて、人民の怒りを叫んだ。

しかし、屈原は人民群衆に屬していただろうか。屈原は『史記』による

と三閭大夫であり、また「離騷」篇の主人公は（それが屈原だと假定して）由緒正しき血筋の出身である。決して「人民群衆」などではない。そもそも古代において「人民」なる者は存在しえたのかという問題もある。また「九歌」は民歌ではない。それが華麗な神靈祭祀であり舞臺藝術であったことは、聞一多自身の九歌研究の最も重要な主張であったはずだ。そして、「統治階層の罪行」「人民の形式」とは何を言うものだろうか。それが『楚辭』文學と一體どういう關係があるというのか。これらの主張は全て、これまでの聞一多の楚辭研究とその態度とを根底から覆すものである。

ここで聞一多は完全に屈原を愛國の闘士と見立て、その闘争と殉死に對して限らない賛美を送っている。「人民」「闘争」「解放」といった語彙は、政治闘争を呼びかける共產黨の宣傳文句そのものである。もちろん、聞一多がはじめから屈原の存在を否定してはいないことは、前に引いた「讀騷雜記」に見たとおりである。しかし『楚辭』を愛國忠臣という觀點から捉える事や、非客觀的な屈原像を作り上げることには對しては、嚴格にそれを否定してきた。ところがいまここでは、屈原を偶像として崇拜し、「人民の詩人」として大いに稱揚している。この「屈原問題」「人民の詩人」の二つの文章は、嚴格な古典文學者だった聞一多の書いたものとはとても思えないほど、主觀的で、そして非學術的である。

聞一多の晩年の民主運動と文學觀の變化については、別稿の中で詳しく述べた。聞一多は、一九四四年一九四五年の二年間の間に、その主張、活動を大きく變質させる。その背景には、急激な社會不安、經濟的貧窮、學生運動の高まり、そして、急速に接近してきた共產黨の政治意圖などがあつた。聞一多は進んでに共產黨に近づき、それまでの自分の研究態度を否定して、すべてを人民・社會の為に盡くすことこそ自分の使命だと、過激な民主運動に走ることになる。そしてその結果、白晝テロにあ

って暗殺されるという劇的な最期を遂げるのだが、その變貌の激しさには、實に驚くべきものがある。この「屈原問題」「人民の詩人」に表れた主張は、まさにその最晩年の激しい政治運動の中から生まれてきたものだったのだ。同じ『楚辭』・屈原論でありながら、これらのものは、以前の彼の楚辭研究とは同列に並べることのできない、全く異質なものだと言わなければならない。

しかし聞一多の楚辭學は、この極めて政治的な社會批判で終わるのではなく、最晩年に一つの大きな美しい花を開く。それは、一九四六年の『九歌古歌舞劇懸解』である。これは、九歌を話劇として實際に上演することを目的として書かれた脚本であった。この研究とも創作とも言える最晩年の作品の中には、政治色も學問臭も一切なく、古代神話の神々が、たくさんの巫女たちと一緒に歌い踊りそして飛翔する、美しくロマン的な情緒に満ちた世界が繰り広げられている。聞一多は學生を指導して、これを實際に舞臺で演じる計畫を立てていたのだが、しかしそのほぼ一カ月後に、國民黨の特務に暗殺されたのだった。

民主愛國に身を捧げ、自らの信念に殉じた晩年の聞一多の生き様は、國を憂えつつ忠義に殉じた屈原の最期と同じ激しさを持っている。このとき一多にとつて楚辭文學は、研究や憧憬の對象として外から向かうものではなく、完全に自らの内に肉化したものとしてあつたに違いない。そのように考えると、聞一多最晩年の楚辭學はまた、學術とは別の次元で大きな意味を持つものであつたと言えるかもしれない。

このように、聞一多の楚辭學は、まずは『詩經』と並行した古代への共感から始まり、文獻考證、時代考證と文化人類學の應用による新しい古典解釋の方法の確立に基づきつつ着實な成果をあげた時期(第一期)、そして原始という時代のもつ強い生命力に對する共感と憧憬の中から生み出された、古代學の一環のなかでの楚辭世界の再構築を試みた時期(第

二期)、そして最後には、民主・愛國という政治的スローガンの下に過激な社會批判に結びついていった時期(第三期)と、様々に變容し、かつ完成することがなかった。おそらく一九四六年に四八歳という若さで悲惨な最期を遂げることがなかったならば、それは更に大きな成果をあげたことが十分に豫想されるのだが、しかし事實上、聞一多の楚辭學は、大きなまとまりを見ることがなく未刊のまま我々の前に残されることになってしまった。

五、聞一多の古代學と楚辭

ここで、『楚辭』を研究對象とすることの意味を考えてみたい。まずそれが、聞一多自身の古典研究の中でどのような意味を持ったのか、ということである。

聞一多の古典研究の對象は多岐に渡る。その楚辭學以外の主な研究を表にすると以下のようなになる。

唐詩研究

・律詩的研究一九三二・少陵先生年譜會箋一九三〇・岑嘉州繫年考證一九三三・賈島一九四一・宮體詩的自贖一九四一・孟浩然一九四三・四傑一九四三

詩經研究

・詩經的性欲感一九二七・風詩類鈔一九三三・匡齋尺牘一九三三

上古文學史研究

・歌與詩一九三九・易林瓊枝一九三九・文學的歷史動向一九四三・中國上古文學(未刊手稿)・七十二一九四三

神話研究

・高唐神女傳說之分析一九三五・姜嫄履大人跡考一九四〇・伏羲考一九四一・道教的精神一九四一・從人首蛇身像談到龍圖騰一九四二・龍鳳一九四四・說魚一九四五

これらすべての古典研究に共通する特徴として、二つのことが挙げられる。まず一つとして、文學作品を學術の對象として非常に嚴格に扱おうとしていることである。それは具體的にいうと、文字・テキストの考證、時代背景の考察、そして新しい研究方法の確立という、とても客觀的でストイックな學問態度にあらわれる。

二つ目として、第一の特徴と矛盾するようにみえるが、文學作品に對する直感や感性を重視したことである。それは特に古代學の分野において、歌謠・舞踏・そして演劇の原點に、古代という時代の持つ大きな生命力を實感し、それとの共鳴の中から新しい視點を生み出す方法として現れる。

そして、他の分野と違い、特に『楚辭』の研究において、聞一多はとりわけその後者、第二番目の部分にだんだん重心が傾いていったように思える。極端な政治運動に走ったことも、その中で屈原を稱揚せざるを得ない欲求を感じたことも、そして最後には凶弾に倒れるほんの一ヶ月前に、九歌を上演することに情熱を注いでいたことも、それは、おそらく聞一多が『楚辭』そのものの中に、學術の世界では収まりきれない大きな力を感じ、『楚辭』そのものと深く共鳴していたからではないかと思うのだ。おそらく『楚辭』は、それを讀む者に、學術の對象として冷靜に分析を加えるだけでは濟まされない、詩的世界への強い誘引力を持つものではないだろうか。

しかしそれは聞一多だけに限られることではない。『楚辭』というこの獨特の世界を持つ文藝を、自らの熱い思いを託する對象として選んだ學者は、それぞれに『楚辭』の世界との深い共感の中から独自の楚辭學を構築した者たちであった。王逸も朱熹も、各々の時代性を背負いながらも『楚辭』を語るることによってしか昇華できない何物かを、その學術の

中に反映させてきた。そのような楚辭學の流れの中で、聞一多もやはり『楚辭』に淫した學者であったといえる。

清華大學で一多が『楚辭』の講義を始めたとき、彼は學校側と何度も交渉して、わざわざ晝間の時間帶を夕刻の開講に變更してもらった。それは、『楚辭』を語るには、眞晝の太陽の下よりも夕闇の迫る薄暮の時間こそふさわしいという考えからだった。合歡の花が夕闇にかすかに香るころ、一多は黒い長衫をまとい、分厚いノートを手にして道士のように教室に現れる。そして葉巻に火をつけ靜かに離駢を語り始める。授業は熱を帯び知らぬ間に月が輝きはじめ、冷たい露が衣を濡らすころになつてやつと家路につく。當時の學生がそう懐古する清華大學での『楚辭』の授業は、聞一多にとって楚辭文學が特別な對象であつたことを物語る逸話である。

六、古代と近代の交錯する時

聞一多の古代學は非常に新しい視點に基づく畫期的なものであつた。それは胡適にはじまり古史辨學派の歴史學や郭沫若らの金石文學者の文字學によつて深められた近代人文學、中でも古代學の成果の一つとしてある。近代という新しい時代に、前近代的學問觀・價値觀を廢した新しい視點が古代に向けられた。それまで特殊な視點でしか見られなかつた古代は、近代になつて様々な可能性に満ちた魅惑の時代として甦つたのだ。聞一多の楚辭學も、その近代人文學の中から生まれたものとして、畫期的な新しさと、そして同時に傳統的な考證の手堅さを持つものであつた。聞一多の古代學は、近代と古代の交錯する特別な時間空間の中から生まれたのである。

しかしここで重要なのは、聞一多と『楚辭』とを結びつけたものが、

このような學術的潮流だけではなかったということである。上に見た清華大學での講義のエピソードからも分るとおり、聞一多は古代學の中でもとりわけ『楚辭』の持つ詩的空間に強く惹きつけられていた。

『楚辭』の世界にあるもの、それは歌い踊る古代的歌舞劇の持つ莫大なパワーであり、神々の亂舞する壮大で華麗な舞臺空間であり、そして流れ行く時間に對する切實な悲哀とそれへの抵抗である。特に「離騷」篇に現れる一種獨特な苦惱の重量觀は、全てをどうしようもなく押し流していく運命の大きな力に對し、全身全靈で抗う時に生まれる拮抗と摩擦の火花のようなものだと感じる。

『楚辭』は、「樂しみて淫ぎず、悲しみて傷らず」という詩の教えの對極にある、樂しみも悲しみも計り知れない力を持った、古代的パトスに溢れる世界として、聞一多の詩的感性と強く共鳴しあつたのである。

このように聞一多の楚辭學は、近代人文學の高まりの中から生まれた、堅實な考證と独自の視點による質の高い學術であつた。しかしその対象である『楚辭』は、それを學術の範圍の中に収めざる事のできない、計り知れない詩的世界への誘引力を持ったものとして聞一多の前に在つたのである。

注

- ① 牧角悦子「聞一多の詩經研究——創造と古典研究をむすぶもの——」(二松學舎大學・『人文論叢』67 二〇〇一年)。
- ② これらは全て湖北版『聞一多全集』(一九九三年・湖北人民出版社)第六—八冊に收められる。
- ③ 注①引用論考、及び同「想像の齒車——聞一多の詩經研究——」(日本詩經學會・『詩經研究』26 二〇〇一年)。
- ④ 一九八六年に出版された何新『諸神的起源』(三聯書店・研究者叢書)では、この「顧菟」を「虎」であるとす。虎もまた人の生死を司る神

として殷から楚に繋がる文化の系統を背景とした神話に登場する。何新は聞一多の説を踏んだ上での考證を行っており、この天問篇の「顧菟」が虎なのか暇臺なのかについては今即斷することは出来ないが、いずれにしてもそれがウサギでないことは明らかである。

- ⑤ この「又」の字は、そのままで解釋すると明らかに文意が通じない。湖北版『聞一多全集』第六冊、及び聞黎明編『聞一多年譜長編』引用の該當部分(四六七頁)では、「你若能平心靜氣的把「離騷」讀懂了、又感覺「離騷」不像是這位屈原原作的。你是被你自己的偶像崇拜的熱誠欺騙了。」と、句點の切り方で文意を通そうとしているが、文脈から見ると「不像是這位屈原原作的」のうしろに讀點がくるのはおかしい。この一文を續けて讀み、文意を通す解釋を考えると、ここには誤字があるとしか考えられない。假に「又」を「不」に改めると、如上の矛盾は解決されることから、この「又」は「不」の誤字であつた可能性が高い。この「讀騷雜記」は梁實秋の編纂していた天津『益世報』文學副刊第五期に載せられた文章で、歿後すぐに編纂された四冊本の『聞一多全集』には収録されていなかった。未だ原載の『益世報』に當たる機會を得ていないので確證は無いが、憶測によつて「又」を「不」に改めて解釋した。
- ⑥ 湖北版『聞一多全集』第一二冊、書信(三六二頁)。
- ⑦ 牧角悦子「神話と戯曲——聞一多の演劇活動——」(日本聞一多學會『神話と詩』創刊號 二〇〇二年)。
- ⑧ 聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』(湖北人民出版社・一九九四年)五九三頁に引用。
- ⑨ 牧角悦子「古代的『詩』の變容——聞一多の古代文學史構想(二)——」(『神話と詩』三 二〇〇四年) 參照。
- ⑩ 牧角悦子「詩人の軌跡——聞一多晩年の民主運動と文學觀——」(創文社『中國讀書人の政治と文學』二〇〇二年)。
- ⑪ 趙儷生『混着血絲的記憶』(上海『文藝復興』第二卷第四期・一九四六年十一月)。